

弘大発技術 お墨付き



佐々木一哉教授

リチウム効率的採取

信頼を得た形で、実用化に向けた進展が期待される。研究論文は10日付で国際学術誌「コミュニケーションズ エンジニアリング」

源。リチウムのサプライチェーン（供給網）では中国企業が大きな存在感を發揮している。

佐々木教授は海水などに電圧をかけ、リチウムと不純物を分離する技術を2020年に開発。従来手法に比べ、経済的に高純度のリチウムを取り出せる。リチウムイオン電池のリサイクル

電気自動車（EV）やスマートフォンに使われる希少金属（レアメタル）のリチウムを効率的に取り出し、再資源化にも応用できる弘前大学発の技術を紹介する論文が2月、国際学術誌に掲載された。世界各国が争奪戦を繰り広げる別名「白いダイヤ」の安定供給を可能にする技術が学術的な

に掲載。新技術は弘大リチウム資源総合研究機構の佐々木一哉教授が中心の弘大の研究チームが開発した。特許は出願済みで、技術の有望性を広く知ってほしいとの思いから論文発表を決めた。

リチウムはリチウムイオン電池の材料で、EVが普及する上で鍵を握る戦略資

国際学術誌に論文、実用化期待

ルにも応用できる。リチウム産業の流れを変える「ゲームチェンジャー」となり得る技術に大手企業も注目。これまでトヨタ自動車（愛知県豊田市）や中部電力（名古屋市中）、非鉄大手DOWAホールディングス（東京）などと共同研究を進めてきた。

弘大の研究チームは欧州連合（EU）の規制強化に対応するため、25年をめどに工業化に道筋をつけたいと考えた。EUの新規制は27年までに電池リサイクルの強化などを企業に義務付け、未対応の製品は域内での販売を禁じる。

佐々木教授は「今後は資金力が重要になる。日本に巨大なリチウム産業をつくるのが目標で、多くの方々の協力が必要だ」と語った。

（工藤貴光）

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]

弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp